

神田散策のあと明大公開講座に参加

——平成30年3月31日

有 満 修

(法学部昭和35年卒)

* はじめに

歩いて呑んで書く——定年後、母校明治の級友二人（上澤博、平山松司）と、こんな散策を楽しんでいます。歩いて呑むだけでは、楽しすぎます。ですから、ボケ防止のために書きます。当然ながらの駄文です。そんな中から、一昨年3月、神田を散策した後、明大公開講座に参加したときに書いたものを送ります。

* 明大通りを神輿が舞う神田祭

「江戸っ子だつてねえ」

「神田の生まれよ」

といえば、ご存知、森の石松だ（浪曲「石松三十石船道中」）。大阪から京都まで淀川の船旅中、乗り合わせた客との会話で出てくるセリフである。「神田生まれ」は、江戸っ子の中でもプレミア感が強かったようだ。神田はそもそも、伊勢神宮に奉納する米を作る田んぼがあったので、そう呼ばれるようになったという。

戦前の神田区と麹町区が合併して現在の千代田区になった（昭和22年）。ビジネスの中心地・大手町や丸の内は、元神田区であった。そんな関係で、神田明神は大手町や丸の内を氏子地域にもつ。初詣に企業幹部の参拝が多いのは、そのためだ。テレビに写るその光景は、今や新春の風物詩といえる。

そんなことから、ささやかながら、我が輩も自分のもつ株式が暴落したりしないようにと、たまには参拝しておきたくなるのである。定年後、十数年は、家人と初詣に行ったり、5月の神田祭を楽しんだりした。学生のころは見向きもしなかったことである。就職してからはそれどころではなかった。だから、それまでの分を取り戻そうと思っていた。

五月晴れのもとリバティータワーの前の明大通りを神輿が舞うのは、よい情景である。神田祭は日本三大祭の一つといわれている。毎年、境内は立錫の余地もないほどの人出で盛り上がる。



浅草の三社祭にも同様に家人とよく行った。お祭りには元気がある。その空気に触れると当方も同調して元気になったような気がする。昔からそんなのを神と思われてきたに違いない。



そんな神田明神も今は春。桜を写そうと今朝は家を早く出た。今春は開花が早かったので、もう盛りは過ぎているかもしれない。そう思っていたのだが、幸いにも空は青く晴れわたり、花を遊ばせているような山門に迎えられた。春爛漫の朝だ。空気も清々しい。境内は散る前の花で輝いている。

* 「お茶の水」は、なんで「お茶の水」なの？

今日は、午後の明大公開講座（駿河台キャンパス）に参加する。午前は、お茶の水から神田方面を散策するので、お茶の水駅に10:00集合と上澤からメール。

約束の定刻に上澤、平山と落ち合う。お茶の水は学生の頃、乗り降りした馴染みの駅である。駅舎もホームも、ほとんど昔のままのようだ。

駅名の由来をたまたま新聞で見たから、この際、記しておきたい。「ぼーっと生きてんじゃないよ」とチョコちゃんに叱られそうだから…。チョコちゃんというのは、NHKの「チョコちゃんに叱られて」という人気番組のCGの人形。頓智のきいた女の子で、笑わせてくれる（金曜の夜8:00～）。

さて、知っておきたい「お茶の水」の地名だが、二代将軍秀忠が、この地にあった高林寺の境内から湧き出した水を使ったお茶を飲んで大変気に入って、その水が徳川家御用達になったことに由来する。その後、神田川が拡張された際、高林寺の湧水は河川敷に含まれて消えてしまった。高林寺は文京区向丘に移転している。

* 神田散策——人気の「かんだ やぶそば」

聖橋を背に本郷通りをスタート。ニコライ堂は学生時代から見慣れた景色だ。その脇を歩いて小川町方面に向かって歩く。この辺の町名の頭には合併のときに「神田駿河台」のように神田がつけられた。昭和の時代でも、江戸っ子にとって「神田」はステータスであったのだろう。昭和37年の住居表示法の施行のときに、一部は「神田」を削って簡素化が図られたらしい。

春の陽射しが快い。ビル群の中で街路の若葉が映えている。有名店「創業元禄15年・笹巻いぬきすし」が静かに佇んでいる。

近ごろ建った巨大な住友ビルの下に、昔は知らなかった「太田姫稲荷神社」がある。地元の人たちが大事に管理している様子だ。賽銭を供えて拝む。

靖国通りに出たら、寛永堂の看板が目に入り、和菓子がおいしそうに立ち寄った。京都菓子司・寛永堂小川町店（03-5282-3993）。本店は、京都四条の本格派である。看板商品の「伝承饅頭 寛永傳」（8個入り¥1100）を土産に買う。

歩きながら平山が「俺、この辺に住んだことがあるのだよ」と。司法試験を受けていたころ、合格した先輩のあとが空いたから、と勧められて…。験をかついでのことだったのだろう。今では笑って話せる青春のヒトコマだ。

有名な「かんだ やぶそば」（神田淡路町。03-3251-0287）を探す。当初からここでの昼食が上澤のプラン。店の前には、11:30開店を待つ行列が

できていた。せいろそば@¥670。納得のいく味である。平山もうなずいている。歩いて汗ばんだから、ビールも旨かった。

「待ち並び老舗やぶそば春の昼」

* 明大公開講座——小田急創業者は明治OB

蕎麦屋を後に、公開講座（13:00～15:00）の会場・明大アカデミーコモン アカデミーホールへ歩いて向かう。公開講座に参加するのは初めてである。上澤が3人分を申し込んでくれた。

会場は満席である。資料によると、主催：明治大学、共催：小田急電鉄であり、講座は、次のような内容であった。

講師：吉田悦志（明大副学長・文学部教授）

テーマ：小田急沿線の明治大学文化を訪ね…ぶらり旅

- 1 小田急創業者・利光鶴松の原点——偉業の原点は武蔵五日市
- 2 作詞家・阿久悠——お茶の水から新宿、そして代々木上原に
- 3 映画監督・岡本喜八——ゴジラは向ヶ丘遊園を避けた
- 4 作家・子母沢寛——鴻沼海岸発「座頭市物語」で繋がる明大文化

吉田教授は、さすがに話し上手だ。我々老人が眠らずにずっとひきつけられた。古賀政男氏のように、いつも語られてきた人ではなく、みんなが知らないであろう利光鶴松氏（1863～1945）に光を当てようというのが今日の教授の狙い（研究成果）であるのだろう。

偉大な大先輩・利光鶴松氏の歩みは、大分市生まれ→武蔵五日市→明治法律学校→弁護士→衆議院議員→実業家。そして年譜に、1923（大正12）小田原急行鉄道株式会社創設、社長。1927（昭和2）小田急開通とある。

今でいう司法試験に相当するのだろうが、弁護士になるための試験を受験。3000名の受験者中17名合格、そんな難関をトップで合格（明治20年23歳）。よほど才智に長けた人であったのだろう。昭和20年7月、81歳で逝去。とにかく、小田急電鉄の創業者が明治OBであったとは、知らない話であった。

そのほか、阿久悠、古賀政男、岡本喜八などの話も、興味深く聴いた。

<参考図書>

「明治大学文人物語」（吉田悦志 明大出版会発行・丸善出版発売 ¥3456）

「阿久悠 詩と人生」（吉田悦志 明大出版会発行・丸善出版発売 ¥2160）

* 時代を制した作詞家・阿久 悠

吉田悦志教授は「明治大学阿久悠記念館」の設立にも深くかかわったようである。文学部の阿久悠氏とは面識はないが、同学年である。定年になってからは、テレビを見る時間ができた。「BS 日本の歌」なども見る。気が付いたことは、阿久悠の作詞によるヒット曲がなんと多いことか、だ。

「また逢う日まで」尾崎紀世彦、「あの鐘を鳴らすのはあなた」和田アキ子、「せんせい」森昌子、「5番街のマリーへ」「ジョニイへの手紙」ペドロ&カプリシャス、「嫁に来ないか」新沼謙治、「宇宙戦艦ヤマト」ささきいさお、「北の宿から」都はるみ、「狙いうち」「どうにもとまらない」山本リンダ、「青春時代」森田公一、「津軽海峡冬景色」石川さゆり、「ざんげの値打ちもない」北原ミレイ、「ロマンス」「思秋期」岩崎ひろみ、「ペッパー警部」「UFO」「サウスポー」などピンクレディー、「舟唄」「雨の慕情」八代亜紀、「もしもピアノが弾けたなら」西田敏行、「熱き心に」小林旭、「北の蛍」森進一、「蛍の提灯」坂本冬美など。

あれもこれもで驚く。すごい才能だ。まさに彼は時代を制している。

「あなたお願いよ 席を立たないで 息がかかるほど

そばにいてほしい あなたが好きなんです」 …「ロマンス」

「あなた変わりはないですか 日ごと寒さがつります

着てはもらえぬセーターを 寒さこらえて編んでいます」 …「北の宿から」

「足音もなく 行き過ぎた 季節を

ひとり見送って はらはら涙あふれる 私十八」 …「思秋期」

「また逢う日まで 逢える時まで あなたは何処にいて 何をしているの

それは知りたくない それは聞きたくない

たがいに気づかい 昨日にもどるから」 …「また逢う日まで」

「お酒はぬるめの燗がいい 肴はあぶったイカがいい 女は無口なひとがいい

灯りはぼんやり灯りゃいい しみじみ飲めばしみじみと 想出だけが行き過ぎる

涙がポロリとこぼれたら 歌い出すのさ 舟唄を

沖の鷗に深酒させてヨ いとしあの娘とヨ 朝寝する ダンチョネ」 …「舟唄」

* もう1人の作詞家・野村耕三

こんな歌謡曲の作詞家では、今は亡き野村耕三氏の面影が浮かぶ。今日の吉田教授の話には出てこなかったが、7歳上の先輩であった。でも、そんなに年の差を感じさせない人だった。野球部だった、と。

最初は仕事の関係で会った。編集第1課長の時代だった。明治の後輩だと分かっ

てからは、無言の親しさに。こちらも気取りのない人間性の豊かな人柄に好感をもった。組織に縛られていることがよく分かるらしく、心を休ませてくれる人だった。酒もよく呑んだし、ゴルフにも行った。カラオケの歌い方も教えてもらった。

同氏のヒット作は、「川」「竹」北島三郎、「渡り鳥」三沢あけみ、「あばれ玄海」天童よしみ、「連理の枝」瀬川瑛子など。

平成13年、72歳で他界。定年で辞めたら、ゆっくり遊ぼうと約束していたのに、残念でならなかった。(株)ぎょうせい創業100周年の祝賀謝恩パーティー(帝国ホテル富士の間)で、石本美由紀氏を紹介してもらったこともあった。同氏は、美空ひばりの作詞が多い。あの「悲しい酒」もそうだ。

野村耕三氏と付き合いまでは、美空ひばりの歌は聞いても、作詞が誰かなど考えなかった。仕事馬鹿で、仕事以外はいつでもよいような日常であった。石本美由紀氏がいかにその道の天才であるかを知ったのは、それからである。

一方、岡本喜八監督の映画では、50年以上も前のことになるが、佐藤允(まこと)が演じる「独立愚連隊」(昭和34封切)が印象的だ。すっかり同監督のファンになった。「独立愚連隊西へ」などシリーズ化されたので、渋谷の東宝によくみに行ったものだ。



* 「錦華小」は「お茶の水小」に

帰りは大学の裏に出て、錦華小学校の方に歩く。夏目漱石の母校として有名だが、校名が変わって、お茶の水小学校（千代田区立）となっていた。近隣の小学校と統合されたようだ（平成5）。千代田区は昼間の人口は100万を超えるが、住民（人口）は5万を切る。統合は、そのようなことと関係があったのかな。ここも春だ。校庭には桜の花が咲き誇っている。

上澤が目星をつけている店で、これから呑む。